

竹返し



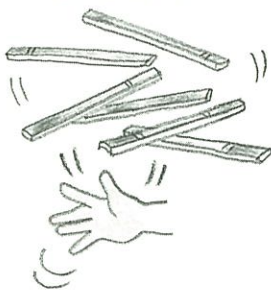
竹片を操って、お手玉のよせ玉のように遊びます。単純素朴な遊びですが、根気と微妙な手指の動きが必要です。戦後、あまり見られなくなってしまいましたが、運動感覚の訓練に取り入れてみてはいかがでしょうか。

《遊び方》

- ① 何本用意するかを決める。普通は6から12本。
- ② 表裏をそろえて全部をにぎる。



- ③ 10cmくらい空中にほおり投げ、落ちてくるものを手の甲で受ける。表側の方が上向きになった状態で受けるのがコツ。
- ④ 表側が上になるように、1本ずつ滑り落としながら、地面に並べる。表で並べた本数を競う。

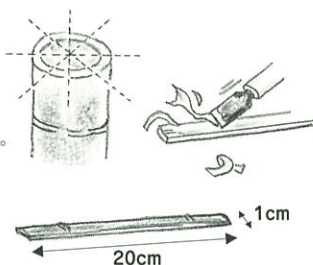


アレンジ

- 全部表で並べられたら、徐々に本数を増やしていく。
- 落とす向きを表か裏かを宣言してから行ってもよい。
- 1本ずつ落とせたら、2回目は2本、3回目は3本と本数を増やしていく。

作り方

長さ20cmほどの竹を幅1cm程度に割っていく。内側(皮の反対側)の肉部を厚さ5mm程度にそぎ、平らに仕上げる。表裏を鮮明にするため彩色してもよい。



竹返しの歴史

地方によっても名称が違い、「きり遊び(青森)」、「六歌仙(福島)」、「はったん返し(愛媛)」、「七つ竹(京都)」、「竹なんご(新潟)」など言うそうです。『日本玩具集解説』(武田真一著 1971年)によれば、「古く奈良朝の頃にもすでに行われ…」とあります。江戸の中期以前には「げへ」とか「つき」と言われていました。

この遊びは、江戸時代を下るにつれて「竹返し」と呼ばれるようになり、全国各地に広まっていきます。どこにでもある竹を使い、作り方も簡単。勝ち負けを争うおもしろさあって、子どもたちの遊びとして定着しました。

『日本児童遊戯集』(大田才次郎編 1901年)によれば、子どもたちは自分で作った皮付きの竹を6本くらい使って遊んだそうです。明治後期に入ると、駄菓子屋や縁日の露店などで、五色に彩色されたものが売られ、この遊びは昭和初期まで見られました。その頃、ドイツのドレスデンで行われた万国衛生博覧会(1901年)に、日本の代表的なおもちゃ78種が出品され、竹返しもそのうちの1つとして紹介されました。